

## 『農業図絵』にみる喫煙とジェンダー

長島 淳子 (早稲田大学 非常勤講師) NAGASHIMA Atsuko

喫煙は、現在もジェンダーの影響を受けやすい領域の一つである。昨今の日本では、強い健康志向から副流煙による健康被害などが問題視され、公的な場所での禁煙が広がっている。しかし、喫煙人口が減少する中で、若い女性の喫煙は増加の傾向にあるという。「男女同権」が「喫煙」という健康を害する行為で示されるのは皮肉だが、「女は煙草を吸わないものである」というジェンダーバイアスを打ち破ろうとする、女たちの意識的な(あるいは無意識の)「抵抗」という意味合いとしては、理解できる。

海外でもジェンダー領域である端的な例として、最近韓国の女子留学生から聞いた話を紹介しよう。韓国では女性の公衆の面前での喫煙はタブーであり、女子学生は煙草を吸いたい時には女子トイレに行くそうである。隣国のリアルタイムの状況に驚かされるが(実は、30年前に筆者が韓国人留学生から聞いた話とまったく変わっていない)彼女は儒教の影響が根強いのではないかと話していた。

さて、煙草の日本への流入は戦国期から江戸初期頃、ポルトガル人によってもたらされたとされる。すでに享保期(18世紀初頭)には全国的に普及したが、度重なる幕府の本田畑への作付け禁止や喫煙の習慣・売買などの禁令にも拘わらず、人々の嗜好品として階層を超えて定着した煙草は、その影しい需要を満たすための商品生産量を拡大させていった。

1717(享保2)年、加賀の十村土屋又三郎によって著された『農業図絵』(以下、『日本農書全集26』農山漁村文化協会、1983を参照)には、金沢近郊農村の一年を通じた農民生活の諸相が生き生きと描写されている。成立年は煙草が普及・定着した時期と重なる。その事実を示すかのように、『図絵』にも煙草の播種(同書 p.47)や

葉を収穫する様子(同書 p.142)が描かれている。

『図絵』には人物の描かれたものが177枚(見開きを2枚とする)あるが、そのうちの15枚に煙管で煙草を燻らす人物の姿を確認することができる。男女別では、14枚が男性の喫煙者で、合わせて18人、残りの一枚に女性一人がみられるが、白髪の「老婆」である(同書 p.58)この「老婆」は、満開の桜の下で花見の宴を催す老若男女の団にいるが、足を伸ばしてくつろぐ傍らの若い男に話しかけてもするように、煙管を片手に煙を吐き出している。この一例を除けば、絵図全体ではその数の多さから、喫煙者はいずれも男性という印象になる。

中村文氏によると、江戸時代の女性の喫煙の特徴は、単独、ないしは女性複数間で行われる。複数の場合、上下関係があるときは目上の女性が喫煙し、対等であればその制約はない。基本的に男性の前では吸わないが、男性が目下であればその限りではないとされる(中村「江戸時代の喫煙の諸相」、『女性の喫煙と社会規範』(財)たばこ総合研究センター他、1995)。したがって女性でも高齢になれば、いずれの制約からも外されることになる。いっぽう、喜多村信節の『嬉遊笑覧』巻10上(1830・文政13)に、「昔はたばこのむ女稀なりしとぞ、「娘容儀草子」に昔は女のたばこ呑むこと、遊女の外は怪我にもなかりしことなるに、今たばこのまぬ女と、精進する出家は稀なりと云り」とあるように、19世紀前半では女性の喫煙は一般的となるが、それ以前では、遊女などを除いて希有なことに類したようである。

こうした事柄を考え合わせると、18世紀初頭の農村生活(遊所ではない)を描いた『農業図絵』に、女性の喫煙場面が描かれていない事情が頷けるのである。また、女性が公衆の面前で喫煙できず、私的空間でのみ許されたのだとしたら、十村のような男性農政吏僚の目の届かない場所での喫煙はありえたと推測するほうが妥当であろう。そして、高齢者であれば、女性であっても何らの制約を受けずに、「花見の宴」で煙草を楽しむことができたことも、この絵図は雄弁に語ってくれるのである。現代に繋がるジェンダーを考えるうえで、示唆に富んだ情報を提供してくれる絵画資料である。



煙管で煙草を吸う「老婆」(『農業図絵』 p.58、部分)